

平成29年度校内研修基本方針

研究・研修担当

1 はじめに

〔校内研修の定義〕

- ・学校が主体となって、教育目標の実現に向け、校長の指導のもと計画的、組織的、継続的に実施する研修
- ・教育目標の実現を目指した、教職員の小グループによる日常業務と結びついた研修（小集団による研修 SGA ; Small Group Activities）

〔校内研修の必要性〕

- ・学校ごとに教育課題が異なるため、学校現場に即した実践的研修が求められていること
- ・山積みする教育上の諸問題に対し、校外研修だけでは不十分であること。また、校外研修は、場所、時間、参加人数の制限があること
- ・今後、ベテラン教職員の大量退職、経験の浅い若手教員の大量採用で、実践的指導力やコミュニケーション力、チームで対応する力などがより一層求められること

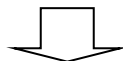
〔校内研修の意義〕

- ・学校の教育活動改善の原動力となること
- ・学校の組織力を向上させること
- ・学び合い、高め合うという同僚性や学校文化の形成に役立つこと
- ・教職員個人の力量を向上させること

（長崎県教育センター H25.3「校内研修のてびき」より）

「校内研修」＝ 組織力と人間性を高める活動の基盤

（長崎県公立学校教職員研修体系要項より）



【R V - P D C A サイクルによる校内研修の推進】

（R＝調査・分析、V＝構想、P＝計画、D＝実践、C＝評価、A＝改善）

- ① R…現状把握と課題の焦点化（強みと弱み）
- ② V…ビジョン共有（学校経営方針：育てたい生徒像、高めたい学校像）
- ③ P…学校経営方針等の共有
（学校経営方針に基づく校内研修にかかる重点努力事項や方策等）
研究組織の編成
研究テーマ設定（学校経営方針を踏まえ、達成可能で成果が実感できるもの）
年間計画立案（学校歴への位置付け）
- ④ D…授業研究や課題研修の実践
- ⑤ C…評価の実施（学校評価との連動）
- ⑥ A…改善策の検討（研修の成果と課題の整理、次年度に向けた方向性の修正等）

2 研究主題

「つながり」で育む主体的な学びの姿を目指して

～横断・協働・連携を意図した教育の工夫を通して～

3 研究主題の捉え方

「つながり」とは、「各教科が横断的につながること」「生徒同士が協働的な学びによってつながること」「学校・家庭・地域が教育活動において連携すること」ということを表している。

教科が横断的につながる学習と言えば「総合的な学習の時間」が代表的ではあるが、他にも全国学力・学習状況調査のB問題で問われる「活用」の力を高めることや、各教科における「言語活動の充実」は、教科単独の学習でなされるものではない。例えば、国語科の特性に応じて育まれる見方や考え方は、各教科等における言語活動等を通じて、他教科の特性に応じ育まれる見方や考え方を広げていく役割もある。このように、各教科における学びは、相互に影響し合いながら成長していくものである。今、生徒に求められている力を身に付けさせるために、各教科での学びを横断的につなげていくことは必要不可欠と言えるのではないだろうか。

生徒同士が協働的に学ぶというのは、いわゆるアクティブラーニングの三つの視点「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」に基づく授業改善の中で捉えた生徒の姿である。「深い学び」の在り方は、教科の特性に応じて示されるものであるが、「主体的な学び」「対話的な学び」は、教科共通で理解できる視点であると考えられる。教室にいる全ての生徒が、主体的に、対話的に学ぶ姿を「協働的に学ぶ姿」と捉えたい。

「主体的な学びの姿」とは、「確かな学力」を求める姿と判断する。「確かな学力」とは、基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力のことであると現行学習指導要領に示されている。基礎的・基本的な「知識や技能」、「学ぶ意欲」や「思考力・判断力・表現力など」を含めた幅広い学力として捉えたい。

〔研究仮説〕

各教科の中で横断的につながる学習活動や、授業や諸活動において生徒同士の協働的な学びの場が設定され、さらに学校・家庭・地域の連携のもとに学力向上に向けた取組がなされれば、生徒一人一人が主体的に学習に取り組む態度が育成されるであろう。

1. 教師が授業において、生徒が各教科で身につけた力を生かすことを意識した横断的な学習活動を仕組めば、生徒の基礎・基本の定着が図られるとともに、思考・判断・表現の力が育成されるであろう。
2. 教師が授業や諸活動において、多様な学習形態や指導方法を工夫して、生徒同士を協働的に学ばせる場面を設定すれば、生徒相互の理解が深まり、学び合い、教え合う態度が育成されるであろう。
3. 学校・家庭・地域が、互いの視点で捉えた生徒の姿を発信し合い、また育みたい子どもの姿を共有しながら学力向上に向けた取組がなされていけば、生徒が安心して生活でき、学習に集中して取り組める環境をつくることができるであろう。以上の3点がそれぞれ具体的な実践によって達成され、相互につながり合うことによって、生徒一人一人が主体的に学習に取り組む態度が育成されるであろう。

4 主題設定の理由

(1) 今日的な教育の動向から

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」(knowledge-based society)の時代であると言われている。知識基盤社会においては「課題を見だし解決する力」「知識・技能の更新のための生涯にわたる学習」「他者や社会、自然や環境と共に生きること」など、変化に対応するための能力が求められる。このような社会の構造的な変化の中を生き、そして担う子どもたちに必要な能力、それが現行指導要領の基本理念である「生きる力」である。つまり、基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」をはぐくむことが、学校教育に求められている。

さらに、次期学習指導要領の改訂に向け、これからの社会に生きる子どもたちに求められる資質・能力について本格的な議論がなされている。その中で、「何を知っているか、何ができるか」はもちろん「知っていること、できることをどう使うか」という資質・能力をはぐくむための具体的な改善の方策の1つとして出されたのが「アクティブ・ラーニング」である。平成26年11月、中央教育審議会に対して文部科学大臣から出された諮問文では、アクティブ・ラーニングを「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」と示されている。「アクティブ」という言葉は「活動性」をイメージさせるが、これは子どもたちの「思考」が「活動」という状況であり、つまり「子どもたちの思考が活性化し、真剣に課題に立ち向かっているような状況」が授業の中で起きることが重要ということである。

現行学習指導要領の基本理念の追求および達成のため、各教科・領域で行われてきた「言語活動の充実」を柱にした授業改善は、まさにアクティブ・ラーニングであると言える。さらに、授業の質の向上のため、新しい学習や指導方法を考えていくことも必要である。例えば、「ジグソー法等さまざまな方法を用いての話し合い活動」や「ICTの積極的な活用」などが挙げられる。

このような今日的な教育の動向を踏まえ、本研究主題を設定した。

(2) 生徒の実態から

平成27年度、28年度の全国学力・学習状況調査及び長崎県学力調査について、本校生徒は全国や県の平均を上回る結果となった。また、学年が上がるごとに課題が改善され、さらなる伸びが見られる結果が出ている。例えば、平成27年度卒業生は、平成26年度実施の県学力調査の国語・数学において課題として挙げられた点について、平成27年度実施の全国学力・学習状況調査では大幅な改善が見られた。

・H26年度 県学力調査 国語

「目的や意図に応じ、必要となる事柄を整理して書く」(根拠を明確にして書く)
正答率の県との差 ⇒ -14.7ポイント(無解答19.2ポイント)

・H27年度 全国学力調査 国語B問題

1三	県との差	-2.8ポイント	(無解答 0ポイント	[県2.1])
2三	県との差	+12.9ポイント	(無解答 5.9ポイント	[県3.0])
3三	県との差	-1.3ポイント	(無解答 5.9ポイント	[県12.2])

・ H 2 6 年度 県学力調査 数学

「有効数字を明らかにした数の表し方について理解している」 (資料活用)

正答率の県との差 - 9.0 ポイント (無解答 26.9 ポイント)

・ H 2 7 年度 全国学力調査 数学 A 問題

1 4 (1) 県との差 + 5.6 ポイント (無解答 3.9 ポイント [県 9.9])

1 4 (2) 県との差 + 6.9 ポイント (無解答 7.8 ポイント [県 8.9])

1 5 (2) 県との差 + 18.3 ポイント (無解答 2.0 ポイント [県 2.7])

さらに、平成 28 年度全国学力・学習状況調査及び県学力調査において、実施該当学年である 3 年生、2 年生ともに全国・県の平均を大幅に上回るとともに、いずれも前年度の結果からも上回った。

・ H 2 8 年度 県学力調査 (国・数→2 年生、英→3 年生)

国語 64.9 (県 63.8 市 61.6)

数学 54.5 (県 51.8 市 44.5)

英語 76.4 (県 63.1 市 65.3)

・ H 2 8 年度 全国学習・学力状況調査

国語 A 81.5 (県 75.4 全国 75.6)

国語 B 71.0 (県 66.7 全国 66.5)

数学 A 64.3 (県 61.5 全国 62.2)

数学 B 46.1 (県 42.5 全国 44.1)

これは、学力向上に向けて、学習環境の整備と授業改善に全職員で取り組んだ結果と考える。生徒が落ち着いて学校生活を送り、見通しをもって学習に臨むことができる状況を継続するためにも、各教科が横断的につながって学習の質を高めること、生徒同士が互いを信頼し協働的に学習に取り組むこと、学校と家庭、地域が連携して生徒の成長を促すことが今後も必要と考える。

(3) 研究の経緯から

本校では、平成 26 年度と 27 年度の 2 年間、「確かな学力の定着を目指した学習指導のあり方 ～学習規律の徹底と各教科における授業改善を目指して～」という主題のもと、研究を進めてきた。学力の土台となる学習環境の整備と、「言語活動の充実」を中心に据えた授業改善に全職員で取り組んできた。その結果、「(2) 生徒の実態から」で述べたように、各調査において課題の改善、学力の向上が見られた。2 年間の研究を基に、平成 28 年度は、学習環境については「学級力の向上」という視点を新たに加え、授業改善については「授業における共通の取組」を設定して取り組むこととし、研究主題を「『つながり』で育む主体的な学びの姿を目指して ～横断・協働・連携を意図した教育の工夫を通して～」と設定し、複数の側面から生徒の主体的な学びを育むこととした。

(4) 学校教育目標との関わりから

本校の教育目標は「健全な生活態度を育成し、豊かな心をもつ生徒を育成する」「基礎・基本の確実な定着を図り、確かな学力をもつ生徒を育成する」「心身ともにたくましく、何事にもねばり強く取り組む生徒を育成する」である。生徒の実態把握のもと、学力の土台となる学習環境を整備し、身につけさせたい力を明確にもって授業改善に取り組んでいくことが、目標の具現化につながるであろう。特に、各教科が横断的につながることは生徒の学びを深め、基礎・基本の確実な定着につながり、生徒が協働的に学んでいくことは互いに切磋琢磨して向上する意欲を生み、それがたくましさやねばり強さにつながると考える。また、学校・家庭・地域が連携することによって、健全な生活環境が生まれ、豊かな心を育むことにつながると考える。

5 研究の基本方針

(1) 職員全員の参加

- 職員がそれぞれの授業改善の取組を公開、共有して教科の横断的なつながりを図る。
- 全職員が年間1回の研究授業を計画・実施する。授業研究については原則として、授業を実施した日に行う。
- 全員参観を原則とした全体研究授業を学期に1回行う。授業研究は、授業を実施した日にワークショップ形式で行う。指導案（指導略案）の形式は原則として統一する。

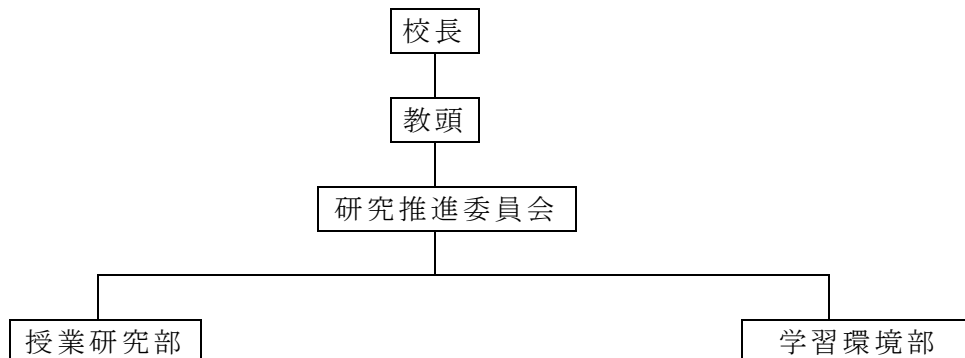
(2) 個人研究とその実践

- 各教科における基礎・基本の定着を目指した具体的方策と評価の方法を研究する。
- 生徒の学習活動の活発化を図るための取組をする。
- 授業実践記録を残す。

(3) 本年度研修内容

- 教科・領域の研究授業の実践
- 各教科における授業改善（言語活動の充実）に関する研修
- 道徳教育に関する研修
- 生徒理解についての研修
- 校外での研修会や出張の報告（研修の共有化）

(4) 研究組織



※ 研究推進委員会は、校長、教頭、教務、研究主任、各研究部長で構成し、各研究部における取組の方向性の検討と進捗状況の確認をする。（必要に応じて拡大することがある。）

◆授業研究部〔「言語活動の充実」を中心に据えた授業改善〕

○授業改善

- ・学習の見通し（「めあて」の提示）を持たせ、振り返りを行う。
- ・書く活動の設定…思考力・判断力・表現力の育成（考えを文章で整理する）
- ・小グループによる「きょうどう（共同・協同・協働）」学習
…学び合い、教え合いによる知識理解の伸長と思考力・判断力・表現力の育成

○特別支援の視点にたった教科指導

- ・効果的なT Tの在り方について

○研究授業、全体研究授業の実践

- ・教師同士の学び合い、教え合いにより指導力の向上を目指す。
（指導力の向上、指導における視点の育成、同僚性の向上）

◆学習環境部

○望ましい学習集団づくり

- ・「学級力プロジェクト」の実施（「学級力プロジェクト」田中博之著）
『学級力アンケート』実施（年2回：1学期末、2学期末）→ 学級会の実施（アンケート結果についての分析、改善策等）→ 実践 → 振り返り
- ・Q-Uアンケート結果の分析（夏季研修）

○特別支援の視点に立った教室や授業環境の整備

- ・教室全面の掲示物の工夫（昨年度より継続）
- ・学習室の整備、特別教室の効果的な活用

○道徳教育の充実

- ・「長崎っ子の心を見つめる教育週間」における取組
公開道徳について学年職員全員で取り組み、取組内容を全職員で共有する。

【学校教育目標】

- (1) 健全な生活態度を育成し、豊かな心をもつ生徒を育成する。
- (2) 基礎基本の確実な定着を図り、確かな学力をもつ生徒を育成する。
- (3) 心身ともにたくましく、何事にもねばり強く取り組む生徒を育成する。



【研究主題】

「つながり」で育む主体的な学びの姿を目指して
～横断・協働・連携を意図した教育の工夫を通して～



研究仮説

各教科の中で横断的につながる学習活動や、授業や諸活動において生徒同士の協働的な学びの場が設定され、さらに学校・家庭・地域の連携のもとに学力向上に向けた取組がなされれば、生徒一人一人が主体的に学習に取り組む態度が育成されるであろう。

授業改善

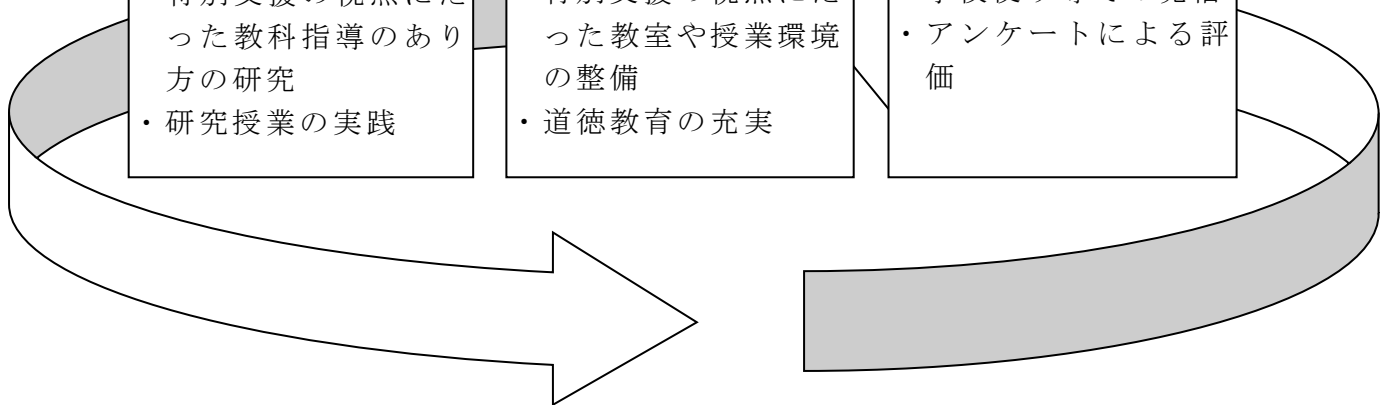
- ・ 授業改善についての研究
- ・ 特別支援の視点にたった教科指導のあり方の研究
- ・ 研究授業の実践

学習環境

- ・ 望ましい学習集団づくり
- ・ 特別支援の視点にたった教室や授業環境の整備
- ・ 道徳教育の充実

**学校・家庭
地域**

- ・ 「生月中学校学びの習慣化」による発信
- ・ 学校便り等での発信
- ・ アンケートによる評価



7 研究組織

